
グレーゾーン

宮地 努

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グレーゾーン

【Nコード】

N0626M

【作者名】

宮地 努

【あらすじ】

中学生である「勇樹」は学校へ行くと異変に気づく。
クラスメイトで親友でもある二人が教室にいないだけでなく、誰も二人のことを覚えている者はいなかった。

たった一人「自分」を除いて。

少年、勇樹が真相を明らかにするため、事件の解決をするための冒険ストーリー。

その事件の裏には少年の知らない何かが動いてた。

序章

「・・・あら勇樹^{ゆうき}くん、今日はどうだった？」

玄関から駆けるようにして勢いよくリビングの扉を開けた少年が、
「あつ、お母さんただいま。今日はね、さとし君とつよし君と遊んだんだ。二人とも僕の大事な友達なんだ！」
と、無邪気な笑顔を作って見せた。

少年は落ち着きのない様子でソファアの周りをうろちよろしていた。

「・・・そうなの、よかったわねえ。もうすぐ二学期が始まるから・・・、お母さん頑張っておいしいお弁当作っておくから。だから頑張って学校に行くのよ。」

そういう母の顔には喜びと不安が交わっていた。

「うん、わかった！お昼ご飯は二人と一緒に食べる約束したんだ！だからちゃんと寝坊しないで学校にいくよ！」

そう聞いて、ハツとした表情を一瞬浮かべた母はすぐにいつもの笑顔に戻り、

「勇樹くんがそんなに楽しそうなのはお母さん久しぶりに見るわ。よっぽど良い友達ができたのね。お母さん嬉しい。」

そう言った後、少年の次の言葉を予測したかのように母は、
「お腹空いたわよね。さつ、そろそろ夜ご飯にしましょ。お父さんは今日も遅いから二人で先に食べちゃいましょうね。」

「うん！今日はなに？」

「今日は勇樹くんの好きなカレーよ。」

やったー！と、喜び踊る少年とご飯を食べた母であったが、その顔からは決して不安が取り除かれることがなかった。

少年が眠りについた後、母はため息をつき、ある場所へ電話をかけた。

「・・・もしもし。夜分遅くに申し訳ありません。実は・・・」

第一章

後日、少年は目覚まし時計の代わりに母からのやさしい声をきっかけに目が覚めた。

「今日は大丈夫？朝ごはんはもうできているわ。・・・無理することはないのよ。」

寝ぼけ眼の少年は布団から立ち上がり、大丈夫だと言って朝の支度を始めた。

学校までの出発の時間に少し余裕を持たせたまま準備は終わり、玄関にある大きな鏡を前にして母は少年に見送るように言った。

「忘れ物はない？気をつけていくのよ。」

はい、という返事と同時に少年は玄関から飛び出すようにして学校に向かった。

「おはよう。」

「おはよう、みんな夏休み何してた？」

「・・・俺宿題まだ終わってないよ。」

「それでね・・・。」

すでに教室の中では生徒がそれぞれ夏休みの思い出話で盛り上がり、残暑の熱気を帯びたまま教室からは笑い声がひっきりなしに聞こえていた。

そんな中、一人の少年が自信のない足取りで教室へと入ってきた。それを目にした者から笑顔が消え失せ、やがて教室が静かになった頃、全員がその少年を見つめていた。

「・・・おはよう。」

誰に向けられた挨拶かわからないほどの小さな声でその少年は言った。

戸惑いの中、一人の女の子が、

「ゆ、勇樹くんおはよう。久しぶりだね。元気だった？」

女の子は精いっぱい笑顔を作ったそう言った。

少年は目を合わすことなく、女の子を通り過ぎ、教室中を見渡した。

そして見慣れた傷跡のある1つの机を見つけ、席へとついた。少年が教室中を見渡したのはもう一つの理由がある。

（さとし君とつよし君は、まだ来ていないのか・・・。）

校内にチャイムが響き渡り、見計らったように先生が扉を開けてやってきた。

「おはよう、みんな夏休みはどうだった？すっかり休んだと思うから、先生今日からビシバシいくわよ！」

同様に長い休み明けであつた先生はいつも以上の笑顔で満ち溢れている。朝のあいさつをしている中、一人の生徒がキョロキョロとあたりを見渡しているのが目に入る。

「勇樹君・・・。」

誰にも聞こえない声でそう呟いた。

「さあ、出席を取るわよ、じゃあまず、赤松君、井上君、上島君・・・。」

と、慣れた感じでリズム良く出席を取っていた中、1人の所でつまずいた。

「・・・聞こえている？勇樹君？」

ハッとした表情をして我に返った少年は小さな声で返事をした。

「・・・はい。」

先生はその様子を見て心配したが、何もなかったかのように出席確認を続けた。

やがて全ての生徒を呼び終えた後に、

「おつ、2学期初日は全員出席してますね！よしよし。」

先生の歡びの顔とは裏腹に1人の少年は青ざめていた。

「・・・先生？」

少年の小さな声は先生に届かなかったらしい。
もう一度、

「先生！」

と、叫んだのと同時に気付けば少年は席を立っていた。先生と同様に周りの生徒もその叫びに圧倒されていた中、少年は胸中にあるものをさらけ出した。

「どうしたの？勇樹君。」

先生が尋ねた。

「・・・先生はさとし君とつよし君の名前を呼んでません。」

先生は無表情のまま固まっている。少年は関係なしに主張を続けた。

「・・・なんでさとし君とつよし君はこの教室にいないんですか！」
と、言いながら少年は歩き始め、

「ここの席と！」

指先を別の方向に向けながら、

「あの席はさとし君とつよし君の席なんです！なんでいないんですか？！先生！」

指さされた生徒と先生は困惑した表情を浮かべ何と返事をすればいいのか悩んでいた。

少年は息を荒げて返事のない先生を睨みつけた。そしてそれは自分以外の生徒にも向けられたが誰ひとり返事がなかった。

やがて先生は言葉を慎重に選ぶような顔つきをし、意を決した後、諭すようにして少年に声をかけた。

「ごめんね勇樹君、先生ね、その・・・さとし君とつよし君のことよく知らないんだ。ほら、先生最近この学校に来たでしょ、まだ生徒の名前を全員覚えてな」

ガタン！という大きな音が先生の言葉を遮った。

少年が机を倒した音だった。

少年は視線を床に落とした。

（どうして・・・？）

「みんな・・・」

少年は唾を飲みこんで、期待を込めてもう一度質問をした。

「みんなは覚えてるよね？」

涙交じりの声と表情は少年の気持ちを如実に表していた。

「ほら、さとし君はものすごく頭がよくてさ、いつもテストの点数が良かったんだよ？つよし君はサッカーがうまくてさ、二人ともクラスのみんなに人気があったんだけど・・・、いつも僕の事を気にかけてくれてさ。」

次に出る言葉を探しながら、少年はみんなの顔を見た。

そこにはあつけにとられたような表情だけがあつた。

返事はいらなかった。

少年は教室を飛び出し、行き先も決めないまま外へ飛び出し駆け抜けていった。

「勇樹君！」

先生の声は少年のいない教室の中で消えていった。

（どうして？どうしてみんなさとし君とつよし君の事がわからないの！）

はあはあ、と息を荒げながら少年は走り、校門の外に出て、人気のない公園のベンチに座り、冷静になった後、今起こっている事態に気付いた。

（さとし君とつよし君の存在が無くなっている・・・！）

（それに気付いているのは僕だけだ。人気者の二人が忘れられているなんておかしい。

おそらく・・・、さとし君とつよし君はみんなの記憶から消された・・・で、犯人はみんなに洗脳か何かをしたに違いない！。）

そして何かを閃いた後、思わず考えが口から出た。

「だけど、僕にはできなかったんだ！」

なぜなら、僕は1学期の後半の時に大きな怪我をして学校に行ってなかったんだ。病院に運ばれた時には危険な状態だったらしくて、後でお母さんがすごく心配していたのを先生から聞いた。

たぶんそんな自分には洗脳する必要はなかったのか、危篤状態だったから洗脳できなかったのか、それともそのまま死んでしまったのかと勘違いしているか。事実はなんであれ、僕は洗脳されていない事は確かだ、なぜなら僕は、さとし君とつよし君をしっかりと覚えている。

その結論に達したのと同時に危険信号が頭の中を駆け巡る。

（でも、今日の僕の行為のせいで、僕は洗脳されていない、二人の事をまだ覚えているというのがバレしてしまった。あの教室は監視されていたっておかしくない、だとしたら次に狙われるのは僕……！）

息を整えた体に再び鞭を打って、全力疾走で家へと駆け抜けた。

お母さんが危険だ！

もう、僕がこの状況をなんとかしなくちゃダメなんだ。

少年が公園から離れていった後、1つの影が少年の後を追っていた。

第二章

家の近くに来た少年は辺りを警戒していた。
家の周囲を見渡し、電信柱の裏や道の曲がり角、ましてや犬小屋の
中まで遠目で確認した少年は安心した。

（よし・・・誰もいないな。）

そう思い、家の門へと急いで駆け寄った。手には素早く中に入れる
よう鍵が握りしめられている。
扉を前にして少年は右手にある鍵を穴に差し込み、静かにそれを回
した。

（・・・？）

手応えがない。

それもそのはず、鍵はかけられてなく、左手に握りしめたノブは何
も抵抗をしないまま簡単にドアは開いた。

（お母さんは家に1人である時も鍵を閉めているはず・・・。）

焦りを覚えた少年の気持ちとは裏腹に、少年は驚くほど冷静で、静
かに、家に忍び込んだ。

音もなくドアを閉めて玄関に入ると、少年はまず耳を澄ました。
誰かの声や足音、誰かの息遣いまでも感じようとしたためである。

（気配はない・・・。）

安堵する気持ちの後に異変に気づく。

（お母さん・・・！）

リビングに行くところには誰もいなかった。

しびれを切らした少年は抑えきれない気持ちを吐き出すように、

「お母さん！」

と、大きな声で呼びかけた。家の中でドシドシと音を立てて走りまわり、少年は母を探すもそこには誰もいなかった。

代わりに、そこで少年の目に入ったものが絶望の底へと導いた。

そこには洗濯物があつた。

洗いたての服がカゴの中に入っていて、見たところ半分しか干されていないようだった。中途半端に放置されていたその様子を少年は見て、答えにたどり着くのに時間はかからなかった。

「・・・ここでお母さんの身に何かあつたんだ。」

鍵の掛かっていないドアと放置された洗濯物を見れば、何かが起こったはずだと予感せずにはいられない。

目に涙を浮かべ、膝から崩れ落ちる少年は自分の無力さを痛感した。

しばらくして、脱力感から何もできない少年を正気に戻したのは、玄関からの視線を感じる違和感であつた。

少年は声を振り絞って、

「誰だ！」

・・・

と、呼びかけるも返事がない。

近くにあったハンガーを握りしめた。武器としては頼りないが、少年の歩を進ませるのには十分であった。

リビングから玄関へと移るとそこには誰もいなかった。

急いで玄関の力を閉めて、今度は一つ一つの部屋を確認し、誰もいないのを確認するたびに部屋の窓の力を丁寧に掛けていった。

（気のせいかな・・・）

そう思い、全ての部屋に異常がないことを確認した後、自分がすべきことを思い出したかのように閃いて、真っ直ぐに家の電話機の前へと向かった。

「お母さん！」

祈るようにして電話をかけた。

電話番号を押して呼び出し音が繰り返される。やがて、「ガチャ」という音の後に受話器から声が発した。

「お母さん！」

嬉しさのあまり思わず口にでた言葉は、無残にも誰も聞いてくれなかった。

「おかけになった電話は現在電波の届かない場所にあるか、電源が・

・・・」

淡々とアナウンスが流れてくる。

「そんな・・・、くそぉ！」

少年の考えていた最悪な状況が疑惑から確信へと変わった瞬間であった。

何度も電話を掛けるも結果は変わらなかった。

やがて、少年は警察へと連絡せざるを得ないと考えたが、その指はボタンを押せず、受話器を静かに置いた。

（警察は信用できない。この前起きた事故でも僕の事を悪く言っただけだったからね。）

（でも、僕はどうすればいいんだ。学校のみんなは洗脳されていて、お母さんはいなくなっ、お父さんは帰ってこない。二人とも連絡はとれない。）

ずっと僕は悩んでいた。

だけどここういう辛い時にはいつも、二人が助けに来てくれるんだ。

今回だってそう。

その日の夜、僕は夢の中でもう一度さとし君に会う事ができたんだ。

第三章

「・・・くん。」

気付けば目の前に誰かがいる。

「ゆうきくん。」

ぼやけたシルエットに目を凝らすと、やがて見慣れた顔の人間が僕を呼んでいるのがわかった。

「・・・さとしくん？」

少年は嬉しさのあまり走って駆け寄った。確かめるように、

「さとしくん！」

ともう一度その名前を呼んだ。

そう呼びかけられて、眼鏡をかけた少年は柔らかい微笑を作って返事に応えた。

「久しぶりだね。」

まるで返事を待っていたかのように、その返事を聞いた直後、次の言葉がすぐに出てきた。

「うん！さとしくん、ぼく心配したんだよ。でもどうして・・・、ここは？」

質問を試みたが、すぐに今いる場所が学校の近くにある公園であると気付いた。

（でもおかしいな。さっきまで夕方だったけど・・・？）

今は強く刺さるような太陽が真上から僕らを見下ろしている。

クスツと笑い、その思惑を感じ取った眼鏡の少年は、手品のネタばらしをするかのような表情で言った。

「ここはゆうきくんの夢の中だよ。君に伝えなくちゃいけないことがあって僕はココにいる。君は不安でいっぱいになって、あの後泣き疲れて眠ってしまったんだよ。」

そうか、と頷いている間、考える暇もなく次の言葉がやってきた。

「僕はココに長くはいられないから手短に話すよ。君は明日、僕らがよく遊んだ秘密基地に行かなくちゃいけない。そこで人が待っているから、後はその人が導いてくれるはず。・・・ゆうきくん、分かっていると思うけど、君は今起こっている事を終わらせなくちゃだめなんだ。」

「それができるのも君だけ。」

少しの間、沈黙が流れた。

「・・・でも！ぼくだけじゃ・・・、何もできないよ。」

「フフツ、そういう弱気な所は変わらないね。分かっているよ、そのために僕とつよしがいるんだから。」

「じゃあ・・・。」

「そうだよ、君は明日つよしと会うんだ。」

おっと、もう時間だ。それじゃあ僕はもう行かなくちゃ。もしかしたらもう会えないかもしれない。君の力になれなくて不安だけど、でも……」

と、言いかけて喋るのを止めた。

「わかってるよ、さとしくん。」

それを聞いた瞬間、何かに気づいた少年は眼鏡を外し、やがて背を向けて歩き始めた。

それは男のルールだとわかっていたからである。

「僕はもうあの頃とは違う。さとしくんとつよしくんの二人のおかげで強くなったんだ。だから心配しないで！」

指で瞼をなぞってはそれを繰り返す。

「だから……。」

次の言葉だけはしっかりと伝えたかった。

涙をこらえて、懂れていたかつての友人の背中に向かって叫んだ。

「僕はもう逃げない！」

それを聞いた少年は歩を止め、振り返って、笑顔だけ残し何も言わず消えていった。

何もなくなつた空間を少年はしばらくの間、見つめ続けていた。やがて、面と向かつて言えなかった二つのセリフを少年は小さな声

で空へと向かってそれを言った。

「さようなら、さとしくん。」

「ありがとう。」

その時、雨はもう止んでいた。

第四章

朝日に気付いたのと同時に少年は上半身を起こして時計に目を配った。

「朝・・・か。」

と同時にもう一つの事に気づく。

「さとしくん！」

返事が返ってこないのはわかっていたが、その名前を呼ばなくてはいけない気がした。

しばらくはぼうとしていたが、眠気が覚めたのと同時に、空腹であることにも気づき、警戒をしながらリビングへと向かった。

「そついや、昨日の昼から何も食べてないや。」
そう言つて自分のお腹に目をやり、ため息1つもらして冷蔵庫のあ
るリビングへと着いた。

「うん？」

心なしか昨日と風景が違うような気がした。しかし、それはいつも
朝食の用意をしてくれる母がいないせいだと自身を納得させて冷蔵
庫のドアを開いた。

そこには野菜からお肉まで全て揃っていた。にも関わらず、料理が
できない自分の無力さを嘆いて、がっかりした表情を作り、何も用
がないまま扉を静かに閉めた。

「あれ？」

少年の視線の先にはカップラーメンとポットがあった。中にお湯も
入ってある。

（お母さんは僕の健康に気を使ってこういう物はいつも買わないの
になあ。）

その僅かな疑問は空腹の念によつて、すぐにかき消された。

「まあ、いつか。」

この状況では何も食べない方が健康に悪いと思い、フタをあけ、お
湯を注ぎ、説明書きの通り3分間待つことにした。

その間にリビングから続く部屋に目をやった。

そこには昨日の状態のまま変わらず放置された洗濯物があり、自分の置かれている状況を再認識させた。

しばらく考えていると少年は次第に怖くなり、何分経ったかなんて時間を気にせずにラーメンを胃袋に押し込んだ。弱気になった感情は空腹のせいだ、と思うとしたからである。

数分間の食事が終わると、もう1つやらなくてはいけない事を思い出し、自分の部屋へ戻った。

椅子に座るとおもむろに引き出しから一枚の白紙とペンを探し出し、真剣な表情でこう書いた。

『この手紙をあなたが見ているとき、ぼくはおそらくこの世にいないでしょう。これはぼくが最後にのこしたメッセージです。

あくのそしきによって、ぼくの友だちがみんなのきおくから消えてしまいました。その友だちも今どこにいますかわかりません。

このじけんをかいけつするためにぼくは今からひみつきちに行きます。そこに答えが待っているからです。

もしも、ぼくがこのじけんをかいけつできなかったとき、この手紙を見ているあなたにおねがいがあります。

ぼくのお父さんとお母さんを助けてください。

ぼくはいままでお母さんたちを泣かせてしまったり、わるいことばかりしてきました。

こんかいも、ぼくのせいで二人はあくのそしきにさらわれてしまいました。

もしも二人に会えたら言っておいてください。

お父さんとお母さんのこどものぼくの名前は立花 勇樹です、と。ぼくがこの世からいなくなっても、たとえ学校みんなに忘れられても、お父さんとお母さんには忘れられたくないからです。おねがいします。』

そう綴られた手紙を引き出しの奥の方へ隠して、最後に親の寝室へと向かった。

期待の念を込めて寝室のドアを開けるが、誰もいなかった。

わかっていたことだったけどやはり少年にとってはショックだった。

寝室にやってきたのは両親の確認のためではない。目的を思い出し、背中に抱えたリュックの位置を正して息を吸い込み、長い間言っていない挨拶を寝室の中でしっかりと言った。

「いつてきます。お父さん、おかあさん。」

そう言っただけは玄関から飛び出していった。

誰かが、「いつてらっしゃい。」と返事をしたような気がした。

第五章

少年が初めてさとしとつよしに出会ったのは山の麓にある小さな洞穴の所であった。

街から離れた所にそれはあって、人が滅多に立ち寄らない神社の脇

道をしばらく歩いてやっとたどり着ける場所であつた。

そんなへんぴな場所に三人が偶然、同じ時間に鉢合わせただけで十分友だちになる状況は揃っていた。

不思議なことに、会った瞬間から自己紹介をする必要もないくらい勇樹はその二人を知っているような気がした。

一人は眼鏡をかけて、冷静な表情をなかなか崩さない『さとし』。勉強がいかにもできそうで、端正な顔立ちからたまにこぼれる笑顔は女子にモテるに違いない、と会った瞬間から勇樹はわかつていた。

もう一人は三人の中で一番身長が高く、スポーツ万能でリーダーシップのある『つよし』。

サッカーが上手くてチームのキャプテンを務めているつよしは、チームやクラスの男子にも慕われていて、さとしとは別なカッコよさがあつた。

その二人とも勇樹にとって理想の自分と言ってもいいくらいの憧れがあり、そんな二人と仲良くなれた自分は誇らしげになっていた。

やがて普段人見知りで友だちを作ることを苦手としていた勇樹にとって、初めて親友と呼べるような仲になり、いつも三人だけで集まるその小さな洞穴を『秘密基地』と呼ぶようになった。

ガシヤンと音を立てて自転車神社に放り投げた勇樹は、脇道を通って秘密基地へと走った。

草木がぼうぼうと生えている中、その脇道は人一人分歩けるほどの

狭い歩幅を維持しながら少年を秘密基地へと誘った。

今度は走るのを止め、はあはあと息を整えながら少年は歩きながら目印である看板に静かに向かって行った。

『秘密基地』

と、そのベニヤ板にマジックで書かれた看板が少年の目に留まる。

「着いたぞ。」

看板のすぐ横には小さな洞穴があり、子供三人入れるくらいの空間と石のテーブルを置いただけの質素な風景がそこに広がっていた。

たどり着くと少年はすぐに異変に気付いた。

「ん？これは・・・。」

石のテーブルの上に何やら鍵のようなものがある。

そのカギを拾い上げるとタグが付いているのが分かり、そこには、

『廃墟のカギ』

と書いてあった。

少年はすぐにその意味がわかった。

学校の裏に何やら怪しげな廃墟があって、いつの日かお母さんと散歩をしていた時にそれを見つけたなあという思い出につながったからである。

「そついやお母さんがあそこには近づいちゃダメだって言ってた。でも、なんでその廃墟のカギがここに……？」

頭の中に疑問詞が浮かんできて、その解を探している時に後ろから何かの気配がした。

ポーン。

コロコロ。

振り返ると、そこにはサッカーボールだけがあった。

そして間もなく頭の中に微かな声が響いた。

ふ……あとは頼んだぜ。ゆづき。ゝ

「つよしくん！」

呼びかけるも返事がなかった。辺りを見渡しても誰もいなかった。

少年はまずいと思い、

「もう時間がない！僕の中からもさとしくんとつよしくんが消えかかってるんだ！」

と、現状をそのように判断した。

急がなくては、と秘密基地を後にした少年は、脇道を通り神社へたどり着き、自転車のハンドルに手を掛けた次の瞬間……！

神社の出入り口から・・・、ゆつくりと、黒いスーツ姿の大人二人が僕の方へと近づいてきた。

指をパキパキと鳴らしながらやってくるサングラスを掛けた大人のうち一人が、遠くの方からでも僕に聞こえるように声を大にしてこ

う言った。

「そこまでだ！」

その大人の声に一瞬ビクついた僕は、弱気になるなといつも教えてくれたさとしくんの顔が頭をよぎった。精いっぱいの勇気と声を振り絞ってその二人に指をさして、

「僕は・・・、お前たちのやろうとしてる事を全てお見通しだぞ！」と二人に言ったやった。

ほう、と頷いた男らはゆつくりとした口調で僕にこう答えた。

「なら話は早い。おそらくお前は俺たちのアジトである学校裏の廃墟に向かおうとしていた所だろうが、ここでゲームオーバーだな。」

もう一人の男が、

「抵抗は止める。大人しくしてればうちのアジトにある機械でお前を洗脳して、親と一緒に家に帰してやるからよ。」

と、脅すようにして僕に話しかけた。

「許さない・・・。」

僕はハンドルを強く握りしめた。

（あとは頼んだぜ。）

つよし君の最後の言葉が僕に自転車のペダルに足を掛けさせた。

次の瞬間、僕は大人二人に向かって自転車で突進していた。

面喰った二人は避けることもできずに勢いのついた自転車と正面衝突する形になり、僕を含め全員が地面に倒れこんだ。

「このガキが！」

男が自転車の一部分を捕まえていて、もう一人の男は自身の足を抑え痛みに抗っている様だった。

僕は自転車を決して離そうとしない男を見て自転車をあきらめた。その代わりに全速力で神社から逃げるように走って行った。

「おい！こら！待ちやがれ！」

その声が聞こえなくなるまで僕は走り続けた。

少年のいなくなった神社はさっきまでの騒ぎとは打って変わって、冷静な表情をしながら男は携帯電話を取り出した。

「予想通り、抵抗されました。・・・ええ、大丈夫です。予定通り自転車を捨て、走ってそちらに向かっています。子供の足ではこちらにたどり着くまでまだまだ時間はかかるでしょう。それでは。」

やれやれ、とため息をつきながら電話を切ると、胸ポケットから煙草を取り出し、もう一人の男にそれを差し出した。

先ほどまで痛みに耐えていた男は、今ではケロツとした表情でその

煙草を受け取り、口にくわえると次にライターの火を貰った。

フーッと煙を吐き出して、

「お疲れ様。」と相棒に声を掛けた。

自身の煙草にも火をともした男も同じ返事を返し、続けてこう言った。

「これで俺たちの仕事は終わったな。」

最終章

キンコンカンコンとチャイムが流れた。

校庭で遊んでいる子供たちはもう少しだけ、という気持ちを抱えながらしぶしぶ教室へと戻ってゆく。

ある生徒は片づけのためボールを片手に持ち、ある生徒は鬼ごっこの第二ラウンドを正面玄関の中で繰り広げていた。

下駄箱のある正面玄関がこの日一番の賑やかな時を迎えている時、その大勢の中に浮かない顔をしている勇樹の姿があった。

全員がそれぞれのタイミングで席に着き始めると、すでに教卓の前で腕を組んでいる先生は顔をしかめて、

「もう授業は始まっていますよ！時間は守りなさい。昼休みを無しにしちゃいますよ。」

そう言っつて、全員が席に着いたのを見届けた後、お決まりの起立からの一連の動作を行い何事もなく授業が始まった。

たった1つ、誰も座られていない席があるが、もはや教室の一部の

風景として固定されていた。

「では……。」

チョークを片手に持ち、今日の授業のテーマを書こうとした瞬間に、ガラガラ……。

と、音を立てて一人の男が教室に入ってきた。

そこには昨日までとは違う、しっかりと前を見据えている勇樹がいた。

静かな教室の中で勇樹の声だけが響き渡った。

「僕はもうみんなの前に現れることはないかもしれない。だから言っておきたいことがあるんだ。」

その顔には自信に満ち溢れていた。

「僕はもう逃げない。逃げる方が辛いつてわかったから……。本当はみんなともっと仲良くしたかったんだけど、僕の方から嫌われるようなことをしていたんだね。」

何も反応がないのをわかった上で続けた。

「何度もやり直せるキツカケはあったはずなのに、僕は一番楽な選択をしていたんだ。みんなが喜ぶようなことも、みんなの役に立てるようなことも、できるはずなのに！僕は何もしないで、ずっと我慢だけしていたんだ。」

「このままじゃきつと僕の事は忘れ去られてしまふ、だったら・・・最後ぐらい僕にしかできないことをするよ。」

言いたい事を全て言い終えた勇樹は教室に背を向けて最後に、

「もう一度会えたら仲良くしようね。今度は僕の方から・・・。」
と最後に言い残し、教室を後にした。

それを聞いて呆気にとられたのは生徒全員であつたが、先生も戸惑いを隠せずやがて、

「じ、自習にします！あと、斎藤君と金島さんは手伝ってほしい事があるので今から先生と一緒に職員室に来てください。静かにしているのよ。」

そう言い残して二人の生徒に目をやって、職員室とは別の方向へと三人は向かつて行つた。

学校が本日最後のチャイムを鳴らし終わった頃、勇樹は体育館の倉庫で身を隠していた。

「そろそろだな。」

その見つめる先には、あとわずかで役目を終える夕陽があつた。

敵のアジトに潜入するのに昼間から堂々とノックをして入るのは、勇気とはかけ離れた無謀策であると判断した少年は、自身に今も監視の目が光っている事も合わせて闇夜の中で行動する結論に至り、あれから体育倉庫の中でじつと息をひそめていた。

部活動のモップ掛けや用具の片づけが滞りなく行われた後、生徒はそれぞれの帰り支度を終えた順にそれぞれが帰路についた。

体育館も校庭も誰もいなくなったのを確認し、事前に決めていた体育館倉庫の1つの窓から勇樹は外へと抜け出した。

学校の裏の廃墟まではそう時間はかからない。

薄暗くなった中でも決して警戒を怠ることなく、学校のライトに気をつけて闇から闇へと少年は行動を開始した。

（今頃、あの黒スーツの男たちは血眼になって僕を探しているだろう。）

「その追われている僕が敵の本拠地に一人で潜入するなんて奴らは思ってもいないだろうさ。」

フツツと不敵な笑みを浮かべた少年は覚悟を決めたせいか、今のこの状況を楽しんでいるかのように見えた。

やがて廃墟から少し離れた草陰に身を隠して、目を凝らすと不自然な事に、廃墟には電気が点いていた。

ここまで来たのだから、と一気に廃墟の玄関まで走って、誰にも気取られないようにそうと鍵穴に鍵を入れてそれを回した。

カチャ、と小さな音は自分以外誰も気づかないであろう微々たるもので、すっかり勢いづいた少年は覗き込むようにして扉を開いた。

（よし、ここには誰もいない。）

明かりのついた玄関からは、二つの部屋へと続く通路と2階へと上がる階段が目に入った。

玄関の扉は閉めずに少しの間を持たせたままにして、音もなく忍び込み、迷うことなく2階へと向かった。

その選択は、廃墟に忍び込む直前に大きなアンテナのようなものが2階の部屋から外へ突き出しているのを確認したからであった。

強い根拠のようなものはないが、あれが洗脳するのに使われているに違いないと思った少年は2階に着くとそのアンテナが設置されているであろう方向に足を運んだ。

そしてそれはあった。

『管理室』

とその部屋の扉の上のプレートにそう描かれていた。

その扉を開こうとした時、別の部屋からうめき声のようなものが聞こえた。

その様子を覗き込んで見た少年は絶句した。

その部屋は暗くて最初はよくわからなかったが、白い布のようなものがまず目に入った。

その布を中心に視界を少しずつ広げていくと。

・・・。

母がそこにいた。

両手足を縛られて、白い布は声を出せぬよう口にくわえさせられた物であった。

しばらくの間、なぜか少年はその場を動くことができなかった。少しの時間が経過した後に母の元へと駆け寄る事が出来た。

驚いたのはもちろん自分だけでなく母も同様であった。

母はやがて抵抗を止めて、安心したかのように僕を静かに見つめていた。

「もう大丈夫だから……。」

そう言っ僕はリュックから果物ナイフを取り出した。

それを見た途端に、母は表情が変わった様子で何かを言いたげであった。その視線は僕でなく、果物ナイフに向けられていた。どうしたんだろう。

昔から刃物を持つと……こう、力いっぱい握りしめて何かをしたくなる衝動に駆られる。

「お母さん、じっとしていてね……。」

僕は手にナイフを持ちながら、母の口に巻かれた布を目でたどっていくと、首元にその結び目があるのを見つけた。

ブチッと音を立てて、僕はそれを力いっぱい切ることができた。

母の口に押し込まれた布は地面に落ちた。

「あれ？お母さんなんで泣いてるの？」

僕は尋ねた。

「お母さんね・・・、ううん、なんでもない。もちろん嬉しくて泣いているのよ。助けに来てくれてありがとう、勇樹。」

お母さんはもの凄く涙を流してた。

僕が助けに来てくれたことがそんなに嬉しかったんだな。と心の中で呟いた。

まだやるべき事がある。

「お母さん、僕は今からみんなの洗脳を解くために、隣の部屋に行ってくる。お母さんは危険だからここで隠れてて。」

「わかったわ。」

力強く母は頷いた。

「だけど。」

母は息子を呼びとめた。

「お母さんは警察に連絡して助けを呼んでみるわ。このままじゃ、」

と、母の提案を聞き終わらず途中で、

「しなくていいよ、お母さん！僕は警察も信じられないよ！」

少年は言葉を遮った。

それに対し、母はありったけの感情を込めて言った。

「お母さんを信じて。大丈夫だから。」

「……。」

僕は返事をしないままその部屋を出て行った。

視界の端にお母さんが携帯電話を取り出して電話を掛けていた様子を捉えたが、僕は足を止めずに管理室へと向かった。

『管理室』。そう書かれたプレートを確認のためもう一度見て、堂々とその部屋の扉を開けた。

中は、管理室のイメージとは少し違った質素な部屋作りであった。

病院の手術室にあるようなベッド、その隣にはモニターとケーブルが2、3本そこに繋がっている。その他に目につくような物は、パソコンが一台と、そのパソコンから伸びているケーブルが外のアンテナに繋がっているようだった。

「これがそうか……。」

少年はこれが洗脳に使われる機材であるとすぐにわかった。

「これを壊せば……！」

部屋は散らかっていて、いかにも廃墟に似合うゴミのようなものが足元に広がっていた。

その中で灰色のレンガが目に残り、少年は両手でしっかりとそれを持ち上げた。

狙いはまずパソコンだった。肩よりも上に持ち上げたレンガを思いきりパソコンに向かって放り投げた。

一瞬でパソコンは見るも無残な形に変わり、機能しないことは確認しなくてもわかる程だった。

そのとき・・・！

ビーツ、ビーツ。とアラームが部屋に鳴り響いた。

「なんだ。」

「どうした。何が起こった！」

と下の階から複数人の声が聞こえた。

少年はしまった、と思いレンガ拾い上げ、今度はベッドの横のモニターに急いでレンガをぶつけた。

ガシャン、と音が鳴り、下の階から足音が次第にこちらに向かってくるのが分かる。

最後に外に突き出たアンテナをどうにかしようと思いきり引っ張ってみたら案外簡単にそれは抜けて、二階からアンテナを地面に放り投げた。

「これで元通りになったのか・・・？」

そう地面に向かって呟いた少年の後ろには、すでに黒スーツ姿の男が部屋の入口に立っていた。

「まさか・・・、お前。」

と、スーツ姿の男はそれぞれの壊れた機器を眺めていた。

その絶望の目で辺りを見渡していたスーツ姿の男を少年は見て、フツと静かに笑い、自分がした行為は悪の組織の陰謀を瓦解したという自信で満ち溢れていた。

だが、すぐにその余裕は消え去った。

スーツ姿の男は内ポケットから拳銃のような物を取り出した。

それを自分に突き出された少年は恐怖のあまり固まって動くことができなかった。

「そこまでだ！」

その声はスーツの男が発したものでなく、廊下の方から聞こえた。

「なにっ！」

男は拳銃の先を廊下に向けて、バンッ、バンッと打ちあいが始まった。

少年の目の前にスーツの男だけがいて、廊下の方では何がどうなっているのを知ることができなかった。

やがて弾丸がスーツの男の肩に当たったようで、膝が床に着き拳銃を持っていない方の手でその傷を抑えていた。

「抵抗は止めなさい！」

そのセリフがとても似合う、正義感に満ち溢れた声の主が僕の目の前に現れた。

手錠を取り出して、両手を背にやっているスーツ姿の男にそれがかけたのは、僕の今の担任である水城先生だった。

「大丈夫？勇樹君？」

呆気にとられて、少年の空いた口からはすぐに言葉を発することができなかった。

「騙していたようでごめんなさいね。」

そう言った先生の後ろには制服姿の警察官がドタバタと廊下を走っていた。

「先生ね、最近今の学校に来たでしょ？実はね、悪の組織が勇樹君のクラスに対して何かを企んでいるって情報が入っていたの。そこで私は教師に成りすまして潜入捜査を続けていたの。」

そう話す先生の後ろには、お母さんが警官の人と廊下を歩いている姿が見えた。

「ここじゃなんだから、いったん外に出ましょ。」

先生はそう言って、僕の手を取り、笑顔で僕の道を手のひらで示し

ていた。

外に出るとパトカーが3台、赤いランプをぐるぐると回して辺りを照らしていた。

「勇樹！」

そう言っただけ寄ってきたお母さんとその後ろに二人の生徒、たしか・・・ええと斎藤君と金島さんだったかな、三人が僕の前に現れた。

その同級生二人は僕の目を見つめてこう言った。

「ごめんね、勇樹君。今までずっと何もできなくて。」

「勇樹、凄いじゃんか！一人で悪の組織に立ち向かったなんて・・・カッコよすぎるぜっ！」

それを聞いて僕は自分のした事が間違いない事に気づかされた。

「勇樹君、ちょっとこっちに来て。」

そう言っただけ先生はみんなとは少し離れた所に僕を連れて行った。

お母さんに少し目をやると、言葉もなくただ笑顔で僕に返事をしてくれた。

「勇樹君、今から先生が言う事は大事な話なの。」

先生の顔は今まで見たことがないくらいの真剣な表情で僕に説明を始めた。

「勇樹君が管理室にある機械を壊してくれて、お母さんが私たち警察を呼んでくれたから悪の組織は滅びたといってもいいわ。」

「だけどね、さとしくんとつよしくんはもうこの世にはいない。残念だけど・・・、お父さんもね。」

先生の言っている意味が少しわからなくなってきた。

「奴らを捕まえた後全部聞いたの。三人ともすでに殺されて、さとしくんとつよしくんに関してはみんなの記憶から消した。一度記憶から消した後は、二度とみんなが思い出すこともできないと。それと、お父さんは・・・。」

そう言つて先生は廃墟に目を向けて、僕に戻した。

「勇樹君とお母さんを守るために最後まで抵抗をつづけたそうよ。それで・・・。」

それを聞いて頭の中が真っ白になった。

「ごめんね、私たちが間に合わなかったせいで・・・。」

先生はいつの間にか涙を流していた。

僕はそれを見て少しだけ、無理やり笑顔を作つて答えた。

「先生は悪くないよ。悪いのは奴らなんだから。先生、助けてくれてありがとう！」

先生はそれを聞いてありがとう、と僕に返してくれた。

「あと、みんながさとしくんとつよしくんの事を二度と思い出せなくても、僕だけはずっと二人の事は忘れないから！」

「うん、うん。」と先生は頷いた。

パトカーが奴らと生徒二人を乗せて走り始め、辺りが暗く静かになったのを見届けた後、初めてこう実感した。

「これで終わっただ。」と。

先生が最後に補足するように付け足した。

「先生が秘密の潜入捜査官ということはみんなには内緒よつ。先生になるのも悪くないかな、って思えちゃったから、しばらくは先生で居続けるつもり。これからもよろしくね。」

そう言っただ先生は、わざとらしく敬礼を僕に向かってした。少し似合わなかったけど、僕は言わなかった。

僕も刑事ドラマのワンシーンを思い出して、背筋をピンと張って、そっと伸ばした左手を額の前に寄せた。

夜風が少し冷たくて、

月の光が僕だけを照らしている。

そんな気がしたんだ。

別にいいでしょ？

今日ぐらい

主人公になれたって。

エピソード

残暑も終わって少し肌寒くなった頃、リビングのテーブルに勇樹の母と一人の男が座っていた。

「勇樹君は？」

「今は学校です。もうすぐ帰ってくるかと思いますが。」

「ではなるべく手短に話しましょう。」

「はい。」

「まず、これが今回掛かった諸経費とその詳細が書かれたものです。」

そう言つて男はクリアケースから紙を取り出し、母親へ差し出した。

紙に描かれている事を男は読み上げた。

「まず人件費です。これがやはり一番費用が掛かりました。次に備品、これは勇樹君が壊したパソコンやアンテナ等、まあ壊されるのを知っていた分、安くつきましたが。後は細かい所で、パトカーと警官の制服を借りた費用や空砲のなる拳銃、口止め料はもちろん、

廃墟に電気を通したり・・・それからカップラーメン代まで。この紙に全てが記載されています。」

母親はその金額を見て少し驚いた様子を見せた。

「当初予定されていた金額とそれほど変わってはおりません。父親にかかっていた生命保険からの金額を考えれば問題ないですよね？おっと・・・、すいません、失言でしたね。」

男はストレス交じりの声で続けた。

「初めて今回の話を聞いた時は、こう・・・、今度の案件は難しいな、と思ったのが本音です。勇樹君が過去に風呂場にてリストカットによる自殺を図った事、そして最近では『さとしくん』と『つよしくん』と呼んでいる架空の、存在しない友人・思い出を創り上げた事。一番の問題は父親を自らの手で刺し殺した事です。その事に自身が気づいてないというか、気付いたからこそ自殺を図ったのか、まあ事実は何であれ今は、勇樹君は新しく作り変えられたこの世界ではうまくやっていきますよ。」

男の話を母親はただ黙って耳を傾けていた。

「もちろん今回の企画の中で勇樹君の学校でのいじめ問題も我々の手で解決しておきました。少なくとも中学生でいる間は、問題なく楽しい学校生活を過ごせるでしょう。」

その言葉を待っていたのか、おもわず母親は安堵の息を漏らす。

と、その時。

「ただいまー！」

玄関から扉を開けた音と同時にその声はやってきた。

「おや、勇樹君が帰って来たようですね。」

男はすでに笑顔の準備をしていた。

「お母さん、ただいま！あれ？この人は？」

「お帰り、勇樹。ほらちゃんと挨拶しなきゃ駄目でしょ。お母さんが以前お世話になった人なんだから。」

「こんにちは。」

「こんにちは、勇樹君。」

少年は地団駄を踏みながら、

「お母さん！今から斎藤君達と遊んでくるね！」
意気揚々と母にそう言った。

「あらそうなの、気をつけて行ってらっしゃい。」

男はその親子のやり取りを見て口を挟んだ。

「勇樹君、お母さんから少し話は聞いたよ。なんか凄い事をやったんだって？僕もその勇気を見習わなくちゃいけないな。ところで学校はどうだい？楽しいかい？」

そう尋ねると少年は、

「うん！とっても楽しいよ！」
と、答えた。

「何だかね、あれからクラスみんなが僕に優しくしてくれたり、勉強とかも教えてくれて、僕なんだか学校が好きになっちゃった!」

うんうん、と頷いていた男は少年に、

「それはよかったなあ。」

と、続けて

「でも勇樹君、それは周りの人が変わったんじゃないくて、勇樹君自身が変わったからなんだよ!それを絶対に忘れちゃダメだよ。」
と、真剣な顔をして言った。

「うん!」

満面の笑顔で少年は答えて、

「お母さん、いつてきまーす!」

と、言い残して玄関から飛び出していった。

少年がいなくなった後、男はフツツと笑って、

「僕たちも頑張ったかいがありましたよ。」

と、母親に言った。

一通りの説明を受けた母は最後に、一番心配している事を男に伝えた。

「くれぐれもこの事は内密にお願いします。」

男は、「うん?」と、まさかの言葉に少し驚いて、自信に満ち溢れた声で答えた。

「ご安心下さい。わが社はお客様の安心・安全を第一に考えておりますので。」

首を少し傾け、上目遣いで母親を覗き込むようにして締めくくりの

言葉を言う。おそらくこれが決められたボーシングなのだろう。

「お客様の問題を秘密裏に解決いたします、当社グレーワールドにお任せを。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0626m/>

グレーゾーン

2010年10月28日03時10分発行